

近代日本における報徳社の教育活動 に関する研究（Ⅰ）

——「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」の活動を中心に——

前田 寿紀

は じ め に

本稿は、近代日本における報徳社の教育活動の特質と役割を明らかにする為の基礎作業の一環として、「杉山報徳社」（明治9年設立）と後に「杉山農業補習学校」に発展した「杉山青年報徳学舎」（明治11年設立）を取り上げて、それらの活動と両者の関係を考察しようとするものである。「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」（以下、学舎と略称）を取り上げた理由であるが、「杉山報徳社」は一般の杉山村民を対象にして報徳社運動を展開し、かつ学舎の教官の雇用費や生徒の学費等を賄ったのに対して、学舎では同村の青少年層に報徳の教説を説き、「杉山報徳社」の種々の教育活動を浸透させていた。したがって、「杉山報徳社」と学舎の活動の分析を通して、当時の報徳社の教育活動の一端を把握することが可能であると考えられたからである。

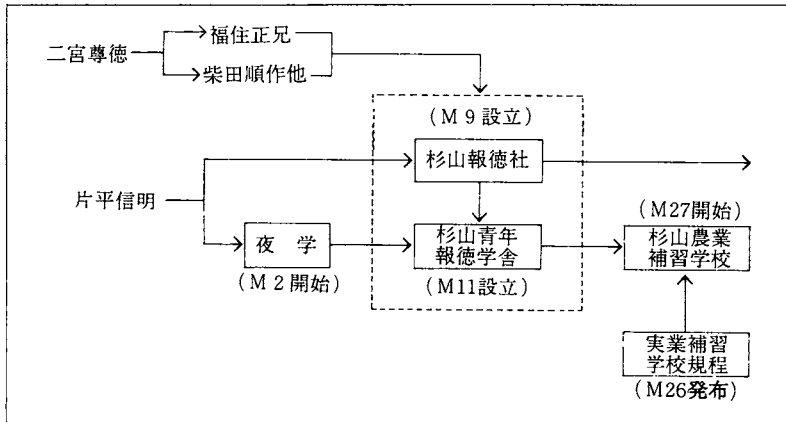
杉山村の報徳社運動を扱ったこれまでの先行研究としては、まず松村祝男「庵原地域におけるみかん栽培の地域的拡大と要因形成」¹⁾を挙げることができる。そこでは、杉山村での報徳社運動が、「上層農」の先導によるみかん栽培発展の為の手段として扱われている。もちろん松村が指摘しているように、杉山村の報徳社が村の経済発展の基盤になっていたことは確かである。しかし、そのような経済的な意味のみならず、杉山村の報徳社運動は、村民の道德面での精神形成にも大きな役割を果たしていたと考えられる。

精神形成の面については、芳賀登の「報徳運動と自力更生——岡田良一郎と片平信明を中心として——」²⁾が、自力更生の観点からそれを取り上げている。しかし、これは杉山村の報徳社運動の中心的役割を担っていた杉山村名主の片平信明一個人に着目して、信明の人と行動を追ったものであるため、必ずしも当時の「杉山報徳社」の教育活動の全貌を捉えているとはいえない。

そこで筆者は、「杉山報徳社」と学舎が経済と道德の両面でどのような活動を行ったかの分析を通して、明治前半期における報徳社の教育活動の一端を明らかにすることにした。

本論に入る前に、まず「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」の歴史について簡単に説明しておきたい（図1参照）。明治2年、駿河国庵原郡杉山村（現在の静岡県清水市杉山）に片平信明³⁾が夜学（同8年からは「夜学校」と称される）を開設し、杉山村独自の教育活動を行った。明治9年12月になると、杉山村の同志が「杉山報徳社」を設立し、報徳の教説に則った様々な事業を展開した。さらに、明治11年には報徳社の青少年版の教育機関として、「夜学校」を発展させて「杉山青年報徳学舎」を設立するに至る。この学舎は、明治23年に井上毅の目にとまることになり、「実業補習学校規程」発布（明治26年）後の明治27年に私立「杉山農業補習学校」となった。

図1.「杉山農業補習学校」成立までの過程



〔備考〕Mは明治の略、以下の表も同様。

I. 明治初期の杉山村の状況と夜学の開設

「杉山報徳社」と学舎が設立されるまでの背景として、まず学舎の前身ともいべき夜学が、どのような杉山村の状況の中で開設されたのかについて述べておくことにしよう。

杉山村は、幕末より人々から「貧乏の代名詞」⁴⁾のように思われていた。村民は、毒荏樹^{どくじんぎ}という桐水油の原料等を栽培して生計を立てていたが、明治維新後の石油の輸入で大きな打撃を受けた。その頃の状況を、『庵原郡庵原村誌』は次のように伝えている。

「一、社団設定以前ニ於ケル部落ノ状況

當部落ハ山間ノ僻地ニシテ素ヨリ耕地ニ乏シク毒荏樹（桐水油ノ原料及三桠ヲ栽培シテ僅カノ収入ヲ以テ生活セル貧村ナリキ然ルニ明治初年ニ至リ石油ノ輸入ノタメニ桐水油ノ價格暴落ヲ来シ加フルニ三桠モ永年栽培ノ結果地力衰ヘ收穫大ヒニ減シ生計ノ財源ヲ失シタル……」⁵⁾

こうした経済的な危機に直面すると同時に、また村の風紀も乱れていた。

「明治維新ノ際旧幕臣駿遠豆（駿州、遠州、豆州——引用者注）地方ニ移住スルヤ當杉山區ニモ一時來住シテ假ニ寺院（杉山村の「海潮寺」——引用者注）内ニ寓スルモノアリ幕末當時ノ夢未ダ覺メズ主人ハ晩酌後ノ慰ミニ夫人ヲシテ三絃ヲ奏セシメ愛娘ヲシテ之ニ和シテ舞蹈セシム里人之ヲ見ントテ來ルモノアレバ歡迎至レルヲ以テ村民ノ老若男女ハ夜毎ニ來集シ隨テ種々ノ弊害ヲ醸スニ至ル恐レアリシ……」⁶⁾

杉山村では、こうした問題を成人に対する農業の奨励によって解決しようとした。まず信明が、農業育成による自力更生を考え、率先して山野を開墾し、茶、桑、柑橘の栽培に従事した。そして、資金の無い村民には無利息貸付をし、種子、苗木等を年々分与して、村の経済を起こそうとした。⁷⁾

しかし、村内には「茶を植ゑれば人が死ぬ」とか「葬式が出来る」という迷信がはやり⁸⁾、信明の努力はうまくいかなかった。そこで信明は、「何トカシテ之ヲ避ケシメント欲シ考慮ノ末一計ヲ案シ有志ノ青年ヲ勧誘シ夜間學習ヲナサシムル」⁹⁾ことにし、明治2年自宅に夜学を開設した。

明治2年には、まだ学制（明治5年8月～）も発布されておらず、必ずしも学校としての体裁は整っていなかったが、信明は居宅表長屋の2階を教場として、10人位の生徒に信明が作成した手本による習字や、算術、読書を教授し、併せて村の産業育成の爲の講話も行った。¹⁰⁾父親が教授する夜学の状況を、小さい頃から見ていた息子の信通は、当時の様子を次のように伝えている。

「其當時は寺小屋もない當時の事でありましたから、文字を知るものはない、然し人として文字を知らない程悲しい事はない、と云ふ事を能く云ひ聞かして、實語教や商賣往來等を教科書として、文字を教へ、又算盤も教へ忸して、村の經濟狀態は斯く――である。とよく云ひ聞かして、今日杉山村では生活の安定を得て居るものはないから、利益のない毒荏を早く見限つて、有利の茶を植ゑるが得策である事を話しましたので、青年は自覺して來る。茶を蒔いても人が死なぬ事が分つて來る、追々茶は植ゑて參りました……」¹¹⁾

さらに、明治5年に至ると、「學制頒布セラレ小學校ノ設立シ就學ヲ督勵セラルルヤ年長兒童ニシテ就學ノ時期ニ後レタルモノモ教育ノ必要ヲ感シ夜學會ニ入會ヲ望ムモノ多ク會場ノ狹隘ヲ告クルニ至ル故ニ生徒ノ半數ハ翁（片平信明——引用者注）ノ門前ニアル庚申堂ニ於テ學習セシ」¹²⁾めるようになった。

青少年の教育は順調に進んだが、村の産業はもう1度大きな危機を迎える。他県の茶業者が、茶に柳を混入して製茶として輸出したのが発覚し、茶価が暴落したのであった。信通によると、この頃の状況は次のようであった。

「明治七、八年の頃となり、漸く茶の收穫は多くなつて來た時に、茶の値段は暴落して收支相償はぬ様になつて來ました。當時は金融機關と云ふものがなく、金を借りると云へば、他村の旦那様より借りるより、外に道はないのでありましたが、夫れも村の人達には貸せぬので、父が纏めて借りて來て村の衆に貸しました。其金も利息のつく金を借りて來て、無利息で元金だけは寄越して呉れ、と云ふて貸しましたが、茶の暴落の爲めに、却て村の人々に怨れました。旦那様（信明）が金を貸して呉れたからコンナもの植ゑた、お蔭で借金が出來た、馬鹿らしい抜いで仕舞へと抜きか、つた人もありました。」¹³⁾

実際に、この頃の杉山村の經濟狀態は悲慘で、明治9年には耕地山林總計220町歩中約3分の1が、他町村に売却される¹⁴⁾という狀態であつた。こうした狀態に対して信明は、

「何にせよ自分の獎勵した作物の結果がそんな譯でありますから自分の内心と云ふものは實に言ふに言はれぬ感じがしまじて或る夜の如きは終夜ちつとも寝られなんだこともあつたのです。製茶が將來産業としての見込がないとすれば何んか早く他の新作物と交代させねばならず、若しも見込があるとしたふらば茶價の恢復して來る迄の村の維持法を考へねばならぬと云ふやうな羽目に立ち到りましたので、無理な心配もし、苦しい負債も起して大變な遣り繰り算段をいたしました。……村の立ち直りも亦此頃の辛苦がよい藥になつたとも今日からは考へらるゝのであります。私が如何かして農村の興復、永安の策を立てねばならぬと氣が附いたのも慥に此頃の事であります。」¹⁵⁾（傍点は原文のまま）

のように、抜本的な対策を立てなければならぬ狀態に陥つた。

II. 「杉山報徳社」の結成とその教育活動

(1) 「杉山報徳社」の結成

このように、青少年を対象とする教育は始められたものの、村の再興のためには一般の村民を対象とした啓発が求められた。そのような中で信明が目にしたのが報徳および報徳社であった。そこで、次に杉山村での報徳社運動の起こりと報徳社の教育活動を見てみよう。

村の再興の手だてに悩み、疲労がたまっていた信明は、明治9年10月それを癒しに熱海に出かける。ここで見つけたのが、尊徳の四大高弟の一人である福住正兄の著『富国捷徑』であり、この発見を契機に信明とその同志は報徳社運動へ没入することになった。

まず、杉山村の同志は、福住正兄や近村の柴田順作（静岡県庵原郡原村名主、天保13年3月に尊徳を訪問し教説を受ける。安政3年「原報徳社」設立。）から、報徳の教説を聞いたり彼らと問答を繰り返して村内に報徳を吹き込んだ。そして、明治9年12月24日に、片平信明と杉山村の片平忠左衛門を社長として、同志44名が「杉山報徳社」¹⁶⁾を結成した。「杉山報徳社」結成に至るまでの経過は、次の「決心書連名記」（明治9年12月24日付）に詳細に記されている。

「決心書連名記

一當村之義者山付ニ而田畑少く農間之余業山稼本業同様ニ致し柴薪等江尻駅迄^(E)里余り之处荷ひ行米麥小遣ニ引換渡世仕來候者多分有之其内中難又者極難ニ至り候て者已申兩度之大凶荒飢饉者勿論其後穀高等之節必死と差支今日之露命毛繫き兼老人妻子一同既ニ餓死可致外無之様相成候處旧地頭所ヨリ救米被下夫是之御仁惠ニ而漸く身命相助り候仕合扱外可成其年々暮し行候者も何歟天災病難等非常之事有之節者致方無之兎角不安心之身之上猶此上當時諸品高價ニ而虚々流連居候而者不知々々驕リニ移り行自然と借財生し詰り退轉亡所同様相成可申左候而者第一祖先之恩儀も忘却し照る日も闇ニ相暮し居如此難有開化之御治世をも弁まへに尊き三條之御教則も耳ニ不入敬神も愛國も更ニ心付可^(E)に只日々之垂渡リニ而已身心を勞シ漂ひ居候様成行可申甚歎ハ敷事ニ者無之哉と呉々御心配有之右ニ付て者相州湯本福住正兄大人近年著述相成候富國捷徑之意味ニ基き可成暮し居候者ハ用心之為メ中難貧者も不及申極難貧者は安心ニ困窮を守り候様致度と種々御厚談有之殊ニ當村社祠掌柴田順作殿ハ先年野州表二宮先生方に被罷出候事も有之ニ付出張を依頼シ右隨身中写し被成候各村趣法帳前末之文言御讀為聞承り一同感服仕候然ル上者此後如何様ニも節儉を尽し本業者勿論余業等何分出精相勤可申と決心仕候右懈怠無之のため於

神前調印い多し差上置候也（以下省略）」¹⁷⁾

すなわちこれによると、杉山村は明治初期、「田畑少く農間之余業山稼本業同様」に行い「柴薪等江尻駅迄^(E)里余り之处荷ひ行」て、「米麥小遣ニ引換」えて暮らす者が多いという状態であった。その中でも「中難」または「極難」に至っては、「大凶荒飢饉」は勿論「穀高等」の際には、「露命毛繫き兼老人妻子一同既ニ餓死可致外無」という状況であった。これに対して、旧地頭所が「救米」を与えてはくれたが、やはり「天災病難等非常之事有之節者致方無之兎角不安心」であり、その上「當時諸品高價」で「自然と借財生し」てしまうのであった。村民は、「祖先之恩⁽⁷⁷⁾儀も忘却し照る日も闇ニ相暮し」たり、「難有開化之御治世をも弁まへに尊き三條之御教則も耳ニ不入敬神も愛國も更ニ心付可^(E)に」に「只日々之垂渡リニ而已身心を勞シ漂ひ居候様」になった。こうした状況に対して福住正兄は、その著『富國捷徑⁽⁷⁸⁾』の意味に基づいて、「可成暮し居候者ハ用心之為メ」に、「中難貧者」も「極難貧者」も「安心ニ困窮」から身を守るように

近代日本における報徳社の教育活動 に関する研究（Ⅰ）

——「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」の活動を中心に——

前田 寿紀

はじめに

本稿は、近代日本における報徳社の教育活動の特質と役割を明らかにする為の基礎作業の一環として、「杉山報徳社」（明治9年設立）と後に「杉山農業補習学校」に発展した「杉山青年報徳学舎」（明治11年設立）を取り上げて、それらの活動と両者の関係を考察しようとするものである。「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」（以下、学舎と略称）を取り上げた理由であるが、「杉山報徳社」は一般の杉山村民を対象にして報徳社運動を展開し、かつ学舎の教官の雇用費や生徒の学費等を賄ったのに対して、学舎では同村の青少年層に報徳の教説を説き、「杉山報徳社」の種々の教育活動を浸透させていた。したがって、「杉山報徳社」と学舎の活動の分析を通して、当時の報徳社の教育活動の一端を把握することが可能であると考えられたからである。

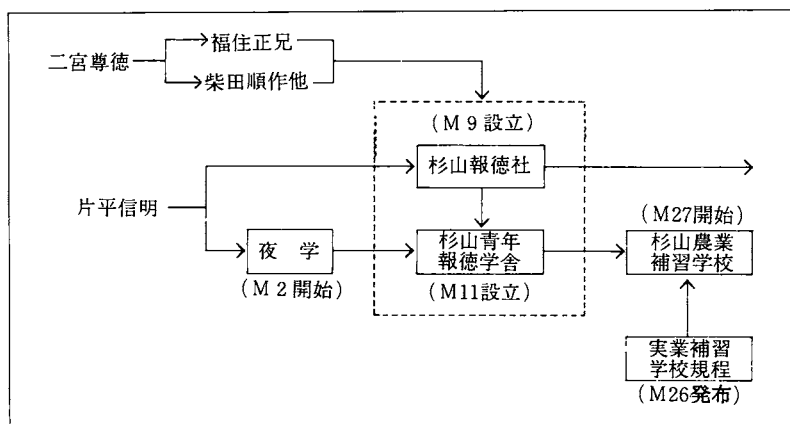
杉山村の報徳社運動を扱ったこれまでの先行研究としては、まず松村祝男「庵原地域におけるみかん栽培の地域的拡大と要因形成」¹⁾を挙げることができる。そこでは、杉山村での報徳社運動が、「上層農」の先導によるみかん栽培発展の為の手段として扱われている。もちろん松村が指摘しているように、杉山村の報徳社が村の経済発展の基盤になっていたことは確かである。しかし、そのような経済的な意味のみならず、杉山村の報徳社運動は、村民の道德面での精神形成にも大きな役割を果たしていたと考えられる。

精神形成の面については、芳賀登の「報徳運動と自力更生——岡田良一郎と片平信明を中心として——」²⁾が、自力更生の観点からそれを取り上げている。しかし、これは杉山村の報徳社運動の中心的役割を担っていた杉山村名主の片平信明一個人に着目して、信明の人と行動を追ったものであるため、必ずしも当時の「杉山報徳社」の教育活動の全貌を捉えているとはいえない。

そこで筆者は、「杉山報徳社」と学舎が経済と道德の両面でどのような活動を行ったかの分析を通して、明治前半期における報徳社の教育活動の一端を明らかにすることにした。

本論に入る前に、まず「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」の歴史について簡単に説明しておきたい（図1参照）。明治2年、駿河国庵原郡杉山村（現在の静岡県清水市杉山）に片平信明³⁾が夜学（同8年からは「夜学校」と称される）を開設し、杉山村独自の教育活動を行った。明治9年12月になると、杉山村の同志が「杉山報徳社」を設立し、報徳の教説に則った様々な事業を展開した。さらに、明治11年には報徳社の青少年版の教育機関として、「夜学校」を発展させて「杉山青年報徳学舎」を設立するに至る。この学舎は、明治23年に井上毅の目にとまることになり、「実業補習学校規程」発布（明治26年）後の明治27年に私立「杉山農業補習学校」となった。

図1. 「杉山農業補習学校」成立までの過程



〔備考〕Mは明治の略、以下の表も同様。

I. 明治初期の杉山村の状況と夜学の開設

「杉山報徳社」と学舎が設立されるまでの背景として、まず学舎の前身ともいべき夜学が、どのような杉山村の状況の中で開設されたのかについて述べておくことにしよう。

杉山村は、幕末より人々から「貧乏の代名詞」⁴⁾のように思われていた。村民は、毒荏樹という桐水油の原料等を栽培して生計を立てていたが、明治維新後の石油の輸入で大きな打撃を受けた。その頃の状況を、『庵原郡庵原村誌』は次のように伝えている。

「一、社団設定以前ニ於ケル部落ノ状況

當部落ハ山間ノ僻地ニシテ素ヨリ耕地ニ乏シク毒荏樹（桐水油ノ原料及三桠ヲ栽培シテ僅カノ収入ヲ以テ生活セル貧村ナリキ然ルニ明治初年ニ至リ石油ノ輸入ノタメニ桐水油ノ價格暴落ヲ来シ加フルニ三桠モ永年栽培ノ結果地力衰ヘ收穫大ヒニ減シ生計ノ財源ヲ失シタル……」⁵⁾

こうした経済的な危機に直面すると同時に、また村の風紀も乱れていた。

「明治維新ノ際旧幕臣駿遠豆（駿州、遠州、豆州——引用者注）地方ニ移住スルヤ當杉山區ニモ一時來住シテ假ニ寺院（杉山村の「海潮寺」——引用者注）内ニ寓スルモノアリ幕末當時ノ夢未ダ覺メズ主人ハ晩酌後ノ慰ミニ夫人ヲシテ三絃ヲ奏セシメ愛娘ヲシテ之ニ和シテ舞蹈セシム里人之ヲ見ント來ルモノアレバ歡迎至レルヲ以テ村民ノ老若男女ハ夜毎ニ來集シ隨テ種々ノ弊害ヲ醸スニ至ル恐レアリシ……」⁶⁾

杉山村では、こうした問題を成人に対する農業の奨励によって解決しようとした。まず信明が、農業育成による自力更生を考え、率先して山野を開墾し、茶、桑、柑橘の栽培に従事した。そして、資金の無い村民には無利息貸付をし、種子、苗木等を年々分与して、村の経済を起こそうとした。⁷⁾

しかし、村内には「茶を植ゑれば人が死ぬ」とか「葬式が出来る」という迷信がはやり⁸⁾、信明の努力はうまくいかなかった。そこで信明は、「何トカシテ之ヲ避ケシメント欲シ考慮ノ末一計ヲ案シ有志ノ青年ヲ勧誘シ夜間學習ヲナサシムル」⁹⁾ことにし、明治2年自宅に夜学を開設した。

明治2年には、まだ学制（明治5年8月～）も発布されておらず、必ずしも学校としての体裁は整っていなかったが、信明は居宅表長屋の2階を教場として、10人位の生徒に信明が作成した手本による習字や、算術、読書を教授し、併せて村の産業育成の爲の講話も行った。¹⁰⁾父親が教授する夜学の状況を、小さい頃から見ていた息子の信通は、当時の様子を次のように伝えている。

「其當時は寺小屋もない當時の事でありましたから、文字を知るものはない、然し人として文字を知らない程悲しい事はない、と云ふ事を能く云ひ聞かして、實語教や商賣往來等を教科書として、文字を教へ、又算盤も教へ忸して、村の經濟狀態は斯く／＼である。とよく云ひ聞かして、今日杉山村では生活の安定を得て居るものはないから、利益のない毒荏を早く見限つて、有利の茶を植ゑるが得策である事を話しましたので、青年は自覺して來る。茶を蒔いても人が死なぬ事が分つて來る、追々茶は植ゑて參りました……」¹¹⁾

さらに、明治5年に至ると、「學制頒布セラレ小學校ノ設立シ就學ヲ督勵セラルルヤ年長兒童ニシテ就學ノ時期ニ後レタルモノモ教育ノ必要ヲ感シ夜學會ニ入會ヲ望ムモノ多ク會場ノ狹隘ヲ告クルニ至ル故ニ生徒ノ半數ハ翁（片平信明——引用者注）ノ門前ニアル庚申堂ニ於テ學習セシ」¹²⁾めるようになった。

青少年の教育は順調に進んだが、村の産業はもう1度大きな危機を迎える。他県の茶業者が、茶に柳を混入して製茶として輸出したのが発覚し、茶価が暴落したのであった。信通によると、この頃の状況は次のようであった。

「明治七、八年の頃となり、漸く茶の收穫は多くなつて來た時に、茶の値段は暴落して收支相償はぬ様になつて來ました。當時は金融機關と云ふものがなく、金を借りると云へば、他村の旦那様より借りるより、外に道はないのでありましたが、夫れも村の人達には貸せぬので、父が纏めて借りて來て村の衆に貸しました。其金も利息のつく金を借りて來て、無利息で元金支けは寄越して呉れ、と云ふて貸しましたが、茶の暴落の爲めに、却て村の人々に怨れました。旦那様（^{信明}）が金を貸して呉れたからコンナもの植ゑた、お蔭で借金が出來た、馬鹿らしい抜いで仕舞へと抜きかゝつた人もありました。」¹³⁾

実際に、この頃の杉山村の經濟狀態は悲慘で、明治9年には耕地山林總計220町歩中約3分の1が、他町村に売却される¹⁴⁾という狀態であつた。こうした狀態に対して信明は、

「何にせよ自分の獎勵した作物の結果がそんな譯でありますから自分の内心と云ふものは實に言ふに言はれぬ感じがしまじて或る夜の如きは終夜ちつとも寝られなんだこともあつたのです。製茶が將來産業としての見込がないとすれば何んか早く他の新作物と交代させねばならず、若しも見込があるとしたふらば茶價の恢復して來る迄の村の維持法を考へねばならぬと云ふやうな羽目に立ち到りましたので、無理な心配もし、苦しい負債も起して大變な遣り繰り算段をいたしました。……村の立ち直りも亦此頃の辛苦がよい藥になつたとも今日からは考へらるゝのであります。私が如何かして農村の興復、永安の策を立てねばならぬと氣が附いたのも慥に此頃の事であります。」¹⁵⁾（傍点は原文のまま）

のように、抜本的な対策を立てなければならない狀態に陥つた。

II. 「杉山報徳社」の結成とその教育活動

(1) 「杉山報徳社」の結成

このように、青少年を対象とする教育は始められたものの、村の再興のためには一般の村民を対象とした啓発が求められた。そのような中で信明が注目したのが報徳および報徳社であった。そこで、次に杉山村での報徳社運動の起こりと報徳社の教育活動をみてみよう。

村の再興の手だてに悩み、疲労がたまっていた信明は、明治9年10月それを癒しに熱海に出かける。ここで見つけたのが、尊徳の四大高弟の一人である福住正兄の著『富国捷徑^{しょうけい}』であり、この発見を契機に信明とその同志は報徳社運動へ没入することになった。

まず、杉山村の同志は、福住正兄や近村の柴田順作（静岡県庵原郡原村名主、天保13年3月に尊徳を訪問し教説を受ける。安政3年「原報徳社」設立。）から、報徳の教説を聞いたり彼らと問答を繰り返して村内に報徳を吹き込んだ。そして、明治9年12月24日に、片平信明と杉山村の片平忠左衛門を社長として、同志44名が「杉山報徳社」¹⁶⁾を結成した。「杉山報徳社」結成に至るまでの経過は、次の「決心書連名記」（明治9年12月24日付）に詳細に記されている。

「 決心書連名記

一當村之義者山付ニ而田畑少く農間之余業山稼本業同様ニ致し柴薪等江尻駅迄⁽⁶⁾壹里余之處荷ひ行米麥小遣ニ引換渡世仕來候者多分有之其内中難又者極難ニ至り候て者已申兩度之大凶荒飢饉者勿論其後穀高等之節者必死と差支今日之露命毛繫き兼老人妻子一同既ニ餓死可致外無之様相成候處旧地頭所ヨリ救米被下夫是之御仁惠ニ而漸く身命相助り候仕合扱外可成其年々暮し行候者も何歟天災病難等非常之事有之節者致方無之兎角不安心之身之上猶此上當時諸品高價ニ而虚々流連居候而者不知々々驕リニ移り行自然と借財生し詰り退轉亡所同様相成可申左候而者第一祖先之恩儀も忘却し照る日も闇ニ相暮し居如此難有開化之御治世をも弁まへば尊き三條之御教則も耳ニ不入敬神も愛國も更ニ心付可ば只日々之垂渡リニ而已身心を勞シ漂ひ居候様成行可申甚歎ハ^(後)敷事ニ者無之哉と呉々御心配有之右ニ付て者相州湯本福住正兄大人近年著述相成候富国捷徑之意味ニ基き可成暮し居候者ハ用心之為メ中難貧者も不及申極難貧者は安心ニ困窮を守り候様致度と種々御厚談有之殊ニ當村社祠掌柴田順作殿ハ先年野州表二宮先生方ニ被罷出候事も有之ニ付出張を依頼シ右隨身中写し被成候各村趣法帳前末之文言御讀為聞承り一同感服仕候然ル上者此後如何様ニも節儉を尽し本業者勿論余業等何分出精相勤可申と決心仕候右懈怠無之ため於

神前調印い多し差上置候也（以下省略）」¹⁷⁾

すなわちこれによると、杉山村は明治初期、「田畑少く農間之余業山稼本業同様」に行い「柴薪等江尻駅迄壹里余之處荷ひ行」て、「米麥小遣ニ引換」えて暮らす者が多いという状態であった。その中でも「中難」または「極難」に至っては、「大凶荒飢饉」は勿論「穀高等」の際には、「露命毛繫き兼老人妻子一同既ニ餓死可致外無」という状況であった。これに対して、旧地頭所が「救米」を与えてはくれたが、やはり「天災病難等非常之事有之節者致方無之兎角不安心」であり、その上「當時諸品高價」で「自然と借財生し」てしまうのであった。村民は、「祖先之恩⁽⁷⁷⁾儀も忘却し照る日も闇ニ相暮し」たり、「難有開化之御治世をも弁まへば尊き三條之御教則も耳ニ不入敬神も愛國も更ニ心付可ば」に「只日々之垂渡リニ而已身心を勞シ漂ひ居候様」になった。こうした状況に対して福住正兄は、その著『富国捷徑^(後)』の意味に基づいて、「可成暮し居候者ハ用心之為メ」に、「中難貧者」も「極難貧者」も「安心ニ困窮」から身を守れるように

「種々御厚談」をされた。また、柴田順作も、尊徳に「隨身中写し」た「各村趣法帳前末之文言」をお読みになり「一同感服」した。こうした経過を踏まえて、44名の同志は、「此後如何様ニも節儉を尽し」て「本業」は勿論「余業等何分出精相勤可申と決心」するに至り、この「決心書連名記」を「神前調印い多し差上置」く、すなわち「杉山報徳社」を結成することになったのであった。

(2) 指導者層の動きと村民の反応

以後、杉山村における報徳社運動は本格的に展開されるが、「杉山報徳社」の教育活動が活発になる為には、村内で多くの人の報徳社運動に対する支持と参加を得ることと、活動の為の資金が確固となることが必要であったと思われる。そこで次に、この問題に対して、運動の指導者層はどのような動きをし、それに対して村民はどのような反応を示したのかをみてみよう。

まず、「杉山報徳社」が設立される以前の村民に対する福住正兄と柴田順作からの「御厚談」が効を奏してか、「決心書連名記」が成立した明治9年12月24日には、44名の同志（柴田順作、片平信明、片平信通等も含む）が、合計18銭7厘¹⁸⁾の善行の為の基金すなわち「善種金」を、「推譲」¹⁹⁾の教説に則って提出している。明治10年には、1年間で合計24回の会議が開かれ、その度ごとに「報徳金」が村民から提出された。「報徳金」は、明治10年中には「善種金」26円42銭2厘5毛、縄37房代44銭4厘、外7銭5厘の合計26円94銭1厘5毛が集まったが、これらは村民の「髪結銭」「小遣銭」「禁酒の代料」から収められたり、毎日縄を少しずつあんで資金をためる「日掛索縄法」によっても追加されていったものであった。²⁰⁾これらの資金は、明治10年12月までには、まず「相州湯本報本社へ」の「加入金」として、「社員二名ニ無利息五個年賦貸付」、「橋梁架替ニ差出ス」、「不幸ナル老女三名ニ恵與ス」、「社員五名出精ノ賞トシテ鉛壹挺宛ヲ與フ」、「夜學校油代補助」として、「夜學校生徒五名盡力ノ賞トシテ筆墨ヲ與フ」の7つに使用された²¹⁾が、これらは少なからず村民の実際の利益につながっていたと思われる。

また信明は、明治18年8月、静岡県令関口隆吉の「懇望ニ依」って県庁に「決心誓約書」を提出しているが、この中で信明は次のように述べている。

「當村社員五十五戸の内家内多病或は分外の家作或は他借金を以地所買求或は子供多等にて借財嵩み利子の拂高^(マツ)ふ困しむるもの千六七戸其憫狀見るに不忍借財返済の方法兼而苦慮いたし居候處時ふる哉當春熱海温泉場にて富田先生並大槻氏福住氏岡田氏等の諸君ヲ拜謁し御懇情に二宮大先生の御事蹟報徳教の御明説拜聴いたし實ニ感腹仕且私家暮方大に耻る所あり依而倅九郎左衛門（信通——引用者注）と再三再四熟議の上年々家内暮方を節儉し……」²²⁾（振り仮名は省略、以下の引用文も同様）そして、次のように「杉山報徳社」へ明治17年以降「善種金」その他を提出することにし、それらを有効に使用することにした。

「當村報徳社へ善種金として年々可致喜捨事

一金三拾圓 但し 凶作又も物入多き年柄にて出金六ヶ數年柄は作木賣拂候ても出金可致事

村社と二宮様祭典費並教會費出金可致事

一金五圓 同 前 全 斷

社中窮乏親類並に貧者へ貸付追々増額の後ハ近より遠ふ可及

一金百圓 貸附方法ハ無利足五ヶ年賦割濟六ヶ年目酬謝金附

右之通決定當年ハ當村片平嘉右衛門へ貸付仕候右は村方社中へ差出社中より貸附不致候ては

一已の名聞を好候やうふ相聞へ却て不_レ宣と存候得共野生家風先々代より至て粗漏の舊習改らず報徳社員の名義ふ恥る事久し譬へば舊弊利己主義の家族は其儘おも家ふ住居し報徳主義は食客同様なやの片隅に閉居する如くふり故_ニ新_ニ元入金百圓宛報徳金と名づけ年々貸渡す時ハ素より資産に乏志き拙家資本金ハ報徳金と變し家内一同報徳の内に生息する様_ニ相成可申壹割五分余の利子を拂ふものに年々繰返し貸付候へば負債主も助り彼我の幸ひと存候間右ふ決定仕候……」²³⁾

実際に信明は、明治17年からに限らず、「杉山報徳社」設立時から継続して社内外へ「報徳金」を提出していた（表1参照）。

表1. 結社後における片平信明の主な金銭等の「推譲」

年・月・日	主 な 事 項
M9・12・24	「積善社」結社にあたり「善種金」8厘加納（「報徳善種金加納物帳」）。
10	「善種金」7円45銭1厘を差出す（「決心誓約書」）。
11	「善種金」15円を差出す（同上）。
11	この頃、村民に5割増給の「働き出し」を行う（『杉山報徳社紀要』）。
12	「善種金」30円を報徳社へ差出す（「決心誓約書」）。
13	「善種金」32円を報徳社へ差出す（同上）。
14	「善種金」40円を報徳社へ差出す（同上）。
15	「善種金」35円45銭を報徳社へ差出す（同上）。
15	村内の稲田が浮塵子の被害に合った際、水桐油の所蔵を安価で放出（『杉山報徳社紀要』）。
16	「善種金」45円を報徳社へ差出す（同上）。
17・8・20	以後、「善種金」30円、「村社と二宮様祭典費並教會費」5円、「社中窮乏親類並に貧者へ貸付」金100円を差出す（同上）。
19頃?	「下野國芳賀郡物井村櫻町官舎ノ址」の「報徳訓之碑」建立に金10円を寄付（『勸農俚語集』第31号）。

このような信明の動きと同時に、「兩師（高田宜和〈明治16年〜同19年まで、後述の「駿河東報徳社」社長〉と柴田順作か？——引用者注）艱苦御丹誠不_レ容易_ニ寒暑風雨を不_レ被_レ爲_レ厭遠路御欠席なく臨場ふし給ひ 神徳皇徳其他諸般々恩澤ふ報ゆるの教へ幽顯の理を示し奪て益なく讓_(て)を益有_(る)の道理を繰返_(す)」²⁴⁾することにより、設立当初は、「奪事を知て讓る事を知らざる累年の習慣不_レ脱善種金小前の分は一ヶ月錢貳三厘に過ず中_ニハ報徳嫌ひの頑固人は陰に人を勸めて廢社にせんと企るもの出沒する」²⁵⁾という村内の状態が、「教の數の功有て社員病氣其外諸事の災難を助け合漸時一村親睦し隣村と爭論もなく各自農業を勉勵志規則を立て儉約を守り休日_ニ□業を勤め賃錢を取り或ハ朝起夜業_ニ繩ない等怠らす善種金に差出」²⁶⁾すようになってきたという。

さらに、明治20年1月28日には、「杉山報徳社」の正副社長と世話掛の合計17名は、杉山村「八柱神社」内に建立（明治17年）された「二宮尊徳翁ノ碑」の前で次のような「誓願書」を奉読し神社に奉納して、自らの運動のやり方の正否を確かめている。

「 誓願書

……社員の内未負債に苦しむ者十七八戸然に我々誤て正副社長世話掛等に撰舉せられしといへとも自素不學短才にして百慮百失その任に堪る事能はず上は誠明（二宮尊徳——引用者注）先生の神慮に悖り下は社員の依託に背かん事を常に恐懼する所也然といへとも志す所終身不

倦不緩善種金取扱之儀に付ては私慾を去り最負偏頗之邪念を斷共々協議を遂思想の及ぶ限社員
員の窮苦を救ひ報徳教隆盛のために盡力可仕候仰願はくは 尊靈哀憐を垂当支社永久繁栄を
擁護成給はん事を……」²⁷⁾

こうして、「杉山報徳社」の社員も次第に増加し（表2参照）、また活動の為の資金も文字通
りの「積小成大」がなされて次第に集積していったと思われる。

表2. 杉山村と社員の状況

年・月	杉山村 の戸数	社 員 戸 数	社員数	典 拠
M4頃まで	51戸			『庵原郡庵原村誌』
M9・12	—	42戸 (村の戸数55とすると76.4%)	43人	「決心書連名記」 『片平信通翁略傳』等
M10頃	—	42戸 (村の戸数55とすると76.4%)	43人	「杉山報徳社経営苦心談」
M11・一	—	53戸 (村の戸数55とすると96.4%)	—	『片平信通翁略傳』
M11・7	—	—	58人	「決心書連名記」
M12・一	55戸	—	—	『庵原村史 近代篇一』
M17・5	—	54戸 (村の戸数55とすると98.2%)	—	『勸農俚謳集』第10号
M23・12	—	55戸 (村の戸数55とすると100.0%)	63人	『大日本帝国報徳』第4号

(3) 「杉山報徳社」の教育活動

「杉山報徳社」の活動が軌道に乗ると、近隣諸村もこれを模倣して報徳社を結成するようにな
った。こうした中、各村報徳社を「総括スルノ必要」²⁸⁾から明治11年11月に「駿河東報徳社」²⁹⁾
(初代社長は柴田順作、明治26年1月～同31年9月まで信明が5代目社長を勤める)が組織さ
れ、「杉山報徳社」もこれの支社となった。そして、明治18年10月からは、『駿河東報徳社規則』
および『報徳社定款』に則ってその組織が一層整理され、教育活動も盛んに行われるようにな
った。

まず、結社に関しては、

「 第一條

當社ハ有志者同盟シ贈從四位二宮尊徳先生ノ徳報主義ヲ奉シテ成ル……」³⁰⁾

のように、尊徳に対する信奉が第一義とされた。また目的は、

「 第四條

當社ハ勤儉推讓ノ徳義ヲ獎勵シ救済慈善其ノ他公益事業ヲ行ヒ資本ヲ助資シテ實業ノ發達ヲ
期ス」³¹⁾

のように明記された。

社員が平素より蓄積した資金は、次の規定に基づき「善種金」として使用することにした。

「 第十七條

一善種金ハ救済慈善⁽³⁸⁾損献金社費及褒賞金等ニ充テ剩餘アルトキハ生産費家政仕法金興業
費等ニ助貸シ又ハ土地株券國債券等ニ運用スルコトアル可シ」³²⁾

表3は、目的別に「杉山報徳社」の「善種金」の使用金額を示したものである。これによると、「推譲」の一環としての「社会事業費」(21.0%)や「道路橋梁費」(18.2%)、そして平素報徳の教説を学習する「教化費」(15.5%)に多額の資金が使用されていたことがわかる。表4は、明治22年度(9ヶ月分)の庵原(杉山村を含む10ヶ村)の歳出予算一覧である。これによると、杉山村で使用される「道路費」は2円35銭、「橋梁費」は1円16銭の合わせて3円51銭(当年度の一年間における庵原の一戸平均村税は1円39銭³³⁾)であった。「杉山報徳社」では、明治10年～同26年までに、一年平均20円77銭5厘の「道路橋梁費」を使用していたから、こうした民間の支出により、杉山村および近隣諸村は助かっていたと思われる。また、明治22年度の時点では、杉山村には公立学校がなかったから「教育費」は使用されていなかったが、「杉山報徳社」では「教化費」として一年平均14円56銭2厘(明治10年～同26年の間)を使用していた。その他、「夜学校」への補助等も行われていた。尚、表5は、「杉山報徳社」を始めとする「駿河東報徳社」が、「褒賞金」を使用して行った表彰活動における受賞者数である。遠州地方で、尊徳の四大高弟の一人である岡田良一郎が社長として経営していた「遠江国報徳社」では、明治19年10月10日に「第一回功労特志力農精業者褒賞授与式」を行ったから、「杉山報徳社」を始めとする「駿河東報徳社」における表彰活動はかなり早いものであった。また、「杉山報徳社」では「救済慈善義損献金」^(捐)の為の資金は、杉山村内に限らず、他村や他県の「難村救済」活動等にも使用された。表6は、外部者の目に止まった活動のうち表彰されたものの一覧である。これの受賞理由を見ると、出火や震災、戦役の際の互助活動、および夜学での教育活動に力を入れていた様子が伺える。

表3.「善種金」の目的別使用金額

(円)

年次	事務費	教化費	道路橋梁費	社会事業費	植林費	特種別費	地租及山林諸費	その他事業費	合計
M10年		1.580	8.232	2.000					11.812
11		6.350	9.890	5.130					21.370
12		4.946	15.000	7.500	1.000				28.446
13	5.245	21.364	40.000	7.000					73.609
14	12.334	10.050	37.115	21.729	3.750				84.978
15	21.108	5.330	35.675	37.935				2.800	102.848
16	17.299	5.000	20.000	19.550				19.116	80.965
17	11.965	8.434	20.200	24.000		50.000		19.716	134.315
18	10.196	12.120	20.461	21.750					64.527
19	6.125	5.522	42.000	22.250				23.250	99.147
20	11.906	13.660	24.000	34.100					83.666
21	6.743	39.130	3.600	21.803			15.000		86.276
22	4.870	2.850		18.000			28.311	48.287	102.318
23	19.717	36.030	4.674	17.800			7.446	136.996	222.663
24	12.463	32.728		20.650			23.906	53.108	142.855
25	2.760	25.053		41.050			43.010	54.100	165.973
26	6.260	17.406	10.000	13.700			16.129	27.980	91.475
合計 (%)	148.991 (9.3)	247.553 (15.5)	290.847 (18.2)	335.947 (21.0)	4.750 (0.3)	50.000 (3.1)	133,802 (8.4)	385.353 (24.2)	1597.243 (100.0)
使用した 年の平均	10.642	14.562	20.775	19.762	2.375	50,000	22,300	42.817	93.955

〔典拠〕大日本報徳社『杉山報徳社紀要』昭和10年再版、PP. 77～78より作成。

表4. 明治22年度の庵原（杉山村を含む10ヶ村）の歳出予算一覧

科	目	予 算 額	付 記
第1款	役 場 費	843.729	(明細は省略)
第2款	会 議 費	33.300	(")
第3款	土 木 費	66.630	
	1. 道 路 費	50.570	庵原20.82銭、原3.71銭、伊佐布3.21銭、吉原3.89銭、杉山2.35銭、山切4.60銭、草ヶ谷4.70銭、尾羽4.17銭、広瀬1.31銭、茂畑1.81銭
	2. 橋 梁 費	16.060	庵原5円、原1.60銭、伊佐布2.10銭、吉原2円、杉山1.16銭、山切1.14銭、草ヶ谷94銭、尾羽86銭、広瀬46銭、茂畑80銭
第4款	教 育 費	649,890	
第1項	給 料	522.000	
	1. 教員給料	265.500	月俸12.50銭庵原1人、月俸10円山切1人、月俸7円庵原1人9ヶ月分
	2. 授業給料	256.500	月俸6円1人山切、月俸5円2人庵原1人、吉原1人、月俸3円2人山切1人、伊佐布1人、月俸4円1人、広瀬、茂畑月俸2.50銭、庵原1人、9ヶ月分
第2項	需用費	111.690	
	1. 備品費	22.000	庵原12円、山切9円、9ヶ月分
	2. 消耗品費	30.150	庵原17.25銭、山切12.90銭9ヶ月分
	3. 雑 費	59.540	庵原7.54銭、山切10円、広瀬、茂畑12円、吉原18円、伊佐布12円、9ヶ月分
第3項	常時修繕費	16.200	
	1. 校堂修繕費	16.200	庵原9円、山切7.20銭、9ヶ月分
第5款	衛 生 費	3.000	(明細は省略)
第6款	予 備 費	16.756	(")
合 計		1,614.305	

〔典拠〕庵原村『庵原村史 近代篇』昭和36年、PP. 14～15。

〔備考〕予算額は、明治22年7月1日～同23年3月に至る9ヶ月分のもの。

傍線は引用者。

また、「杉山報徳社」では、次の規定により貯蓄活動も盛んに行った。

「 第二十一條

一當社ハ天災地妖其ノ他ノ災害ヲ備フル爲メ金穀ノ貯蓄ヲナスコトアルヘシ³⁴⁾

「杉山報徳社」では、既に明治17年1月から、「各自ノ子孫ニ與フルノ外一般社員中産業資金不足ノ者ニ低利ノ資金ヲ供給スルノ目的ヲ以テ」³⁵⁾「与孫金」という貯蓄を始めていた。さらに、明治27年からは、「柑橘ノ備荒貯蓄ノタメ各自毎年柑橘賣上高ノ何分ヲ貯蓄シ総金高金五万円ニ至ル迄利倍増殖シ其ノ運用ハ肥料ヲ購入シ社員ニ貸與ス又餘金ハ低利ヲ以テ貸附スルモノトス」³⁶⁾という「柑橘積立金」制度も行っている。

「常會」もまた、「杉山報徳社」の重要な教育の場となった。これは、

「 第十三條

當社常會ハ毎月^(マツ) 回トシ第三章第四條ノ目的ニ就キ社員ヲ會シ演説若クハ討議研究ヲナスモノトス³⁷⁾

というもので、具体的には次の規定による事項が討議研究された。

「一. 會議ノ節研究スヘキ事業ノ要領大率左ノ如シ

耕耘ノ便利肥培ノ法ヲ究ムル等ノ事

表5. 「駿河東報徳社」における「力耕精業及特別善行アルモノ」の表彰 (人)

年 度	「金 ^(モノ) 員ヲ授與セシモノ、數」	「物品ヲ授與セシモノ、數」	合 計
M12年	19		19
13	44		44
14	44		44
15	44	28	72
16	25		25
17	36		36
18	「各支社へ二宮翁夜話ヲ寄贈」		—
19	31		31
20		16	16
21		21	21
22	1	21	22
23		21	21
24		30	30
25	1	32	33
26		38	38
合 計	245	207	452

〔典拠〕 静岡県『静岡県報徳社事蹟』報徳学図書館、明治41年5月再版、PP. 77～78より作成。

表6. 杉山村の報徳社運動に対する表彰

受 賞 日 (年・月・日)	受賞者	賞 与 者	賞 品	受 賞 理 由
M18・4・24	杉 山 報 徳 社	静 岡 県 令 関 口 隆 吉	木盃壹個	「庵原郡茂畑村失火ノ際罹災者へ金拾五円差出候段奇特ニ付……」
25・7・6	杉 山 報 徳 社	静 岡 県 知 事 時 任 為 基	?	「明治廿五年一月中庵原郡庵原村庵原及原出火ノ際罹災者救助トシテ金貳円施與候段奇特ニ候事」
26・12・13	片平信明	静 岡 県 知 事 小松原英太郎	木盃壹組	「夙ニ志ヲ実業ニ注キ率先シテ山野ヲ開墾シ茶桑蜜柑ヲ培養シ村民ニ栽培ヲ勧誘シ無資力者ニハ種子苗木ノ代金ヲ貸與シ専ラ殖産ヲ計リ殊ニ力ヲ森林繁殖及道路改良ニ致シ常ニ勤勉儲蓄ノ必要ヲ説キ村民ニ應分ノ儲蓄ヲ爲サシメ其他夜學校ヲ設ケ青年ヲ教導スル等其行爲洵ニ奇特トス……」
29・6・20	杉 山 報 徳 社	静 岡 県 知 事 小松原英太郎	木盃壹個	「一金拾七円 人夫四拾六人 明治二十七八年戦役之際従軍者家族賑恤トシテ頭書之通差出候段奇特ニ付……」
30・10・15	杉 山 報 徳 社	岐 阜 県 知 事 湯 本 義 憲	?	「明治二十四年十月當縣下震災被害者救恤トシテ金壹圓惠與候段奇特ニ候事」

〔典拠〕 庵原村役場『庵原郡庵原村誌』大正2年、および『報徳教と片平信明翁全 一名杉山報徳社事蹟』中上喜三郎、大正十二年第五版、PP. 116～117より作成。

〔備考〕 振り仮名は省略。

工業ヲ起シ殖物富産ノ法ヲ立ツル等ノ事
 商法ノ利ヲ正クシ公利ヲ謀ル等ノ事
 勤儉ヲ行ヒ窮民ヲ救済スル方法等ノ事
 荒蕪ヲ開拓シ水利ヲ便ニシ山林ヲ繁殖スル等ノ事
 勸業方法等ノ事
 風俗ヲ醇良ナラシメ徳義ヲ厚フスル等ノ事」³⁸⁾

「常會」では、「報徳學ノ研究ヲ主トシ書籍に偏セズ不書ノ經ニヨリテ真理ヲ講明ス」³⁹⁾することに価値が置かれた。と同時に、社員には、平素から「報徳書農工商書經濟書其他有益ノ書」を研究することが求められた。⁴⁰⁾

尚、「常會」の際になされた演説の全様は必ずしも明らかではないが、現在入手しうる演説等の記録をまとめてみると表7のようになる。これによると、柴田順作は、尊徳に接した経験から、報徳の真意や「一元融合」の教説をわかりやすく説明している。また、片平信明は、杉山村の状況や実体験に基づいたプラグマティックな思考で報徳を解釈していた。西ヶ谷可吉（6代目「駿河東報徳社」社長）は、明治という時代状況にいかにも報徳を応用すべきかを考えていたようである。「常會」には、青少年も報徳書を輪読したりして参加していたから、こうした演説の主張は青少年層にも次第に浸透していったと思われる。

もとより、多くの報徳社は比較的貧しい村に起こり、平素から会議を開催したり貯蓄を行い、農村に危機が訪れても信用互助の地縁をもって根強い力を発揮し、安定した事業を存続させるという形をとるが、以上の活動をみると「杉山報徳社」はその典型であったように思われる。

表7. 演 説 の 状 況

氏 名	演 題	年・月・日 (場 所)	主 内 容
柴田 順作	—	? (?)	<p>「……今杉山の村が、借金で困つておるから、その借金を返し、貧乏を免れて、富裕になりたいからと云ふために、報徳でも聞いて見たいのだらうが、報徳はそんな安っぽい物ではない、先づ以て報徳とは天地人三才の徳に報ゆるために働く仕事である、／……、一體報徳で云ふ徳に報ゆると云ふことは、私共の人の軀は、天子様の御恩や國の御恩や、社會の恩などの、一切の恩を蒙つておるのである、金でこそないが、云はゞ『恩と云ふ』借金まみれの身軀である、だから其の御恩返しをするのである、……」</p> <p>「……例へば、この杉山には五十五軒の家がある、處がこの五十五戸の人々が、……、銘々に人を突き飛ばし、轉ばし倒す様な事のみ、頻りに考へて、之を行つたとしたらどうであるか、村中の人は、お互に勞して功なきのみならず、人を亡ぼし、人を惱まさんとして、お互銘々が亡びる事に立至るのみである。／其の突飛ばす餘力を以て、強き人は弱い人を救ひ、富める人は貧しき人を救ひ、お互に助け合つて行けば、五十五戸のものが皆榮ゆることは、云はずとも明らかな事柄である、二宮大先生も、『天地相和して、萬物生じ、夫婦相和して、子孫生じ、貧富相和して財寶生ず』と申されて、一村一和して、貧者も富者も、地主も小作人も、乃至は資本家も勞働者もお互に相助け、相和したならば、この社會は自然と立派な社會になるのである、……」(以上、「柴田翁報徳談の一節」、大日本報徳社『杉山報徳社紀要』昭和10年再版、PP.178～179、傍点は省略)</p>
			<p>「信用は形なき財産／であります、苟くも人に對して信用を缺くが如き行が有つてはふらぬ、私は二十四歳家督を繼ぎ村名主の重任に當つた時神明を拜して金品一切の物は公私の別なく毫厘も私すまじと誓ひ爾來、自分では今日まで此誓に違背しなかつ</p>

氏 名	演 題	年・月・日 (場 所)	主 内 容
片 平 信 明	—	随 時	<p>た積である。斯る事は自分一個の秘事で他人に打ち明かすべきことではないが今後とも諸子をして余が轍を踏ましめむの微意に外ならぬのである。」</p> <p>「生活は極めて簡易にして消費を拡大し、生産は成る可く念を入れて費散を考ふべし。」</p> <p>「商人は高く賣るのみが能ではふい一般が困難する時には務めて安く賣つし年來の商恩に報いなくてはならぬ。」</p> <p>「家に在つて巧に指揮するよりも拙く實地に臨んで監督するに若かき。」</p> <p>「土地にふさはしき仕事を見出すべし。」</p> <p>「農夫は山野に斃るゝが名譽ぢや……、余は農夫ぢや、萬一其名譽の戦死を遂ぐることもありともどうして老衰したからとて田野の巡視を怠ることが出来やう。」(以上、西ヶ谷可吉編『片平信明翁傳 附杉山報徳社成績一斑』開明堂、明治42年再版、PP. 17~20、傍点は省略)</p>
	「父母報恩談」	M31・9・30 (於「八柱神社」拜殿)	<p>「……父母をして、生前及び死後に於て遺憾なからしめんとせば、……、唯だ順次斯道を勤むべし。若し此道に依らずして外に富貴を願はゞ、得る事ありと雖も猶足らず、推譲は人道の粹なる事を知らず、非道にして唯自己の家産のみ増殖する時は、隨て災害併ひ至りて遂に天を怨み人を怨むに至る。是れ道を學ばざるの咎なり。……／…… 誠明先師(二宮尊徳一引用者注)の道歌に、／何事も、事足り過ぎて、事足らず／徳に報ゆる、心なければ／との教あり。」(「片平信明翁演説筆記」、大日本報徳社『杉山報徳社紀要』昭和10年再版、P. 159)</p>
西ヶ谷可吉	「報徳學ノ起因ヲ論ジテ信用組合ニ及ブ」	M24・12・一 (於「駿河東報徳社」冬季大例会)	<p>「……吾政府ハ我邦ノ現状ヲ觀察セラレ人民ニ自助自活ノ精神ヲ振興セシメンガ爲ニ第二期帝國議會ヘ信用組合法案ヲ提出セラレタリ……品川國務大臣(品川弥二郎一引用者注)ハ該案ノ要旨ヲ演舌セラル、ニ當テ『贈從四位二宮尊徳翁ノ遺法ニナレル報徳社ノ如キハ以德報徳之精神ニ出ツルモノナレト殆ンド之ヲ信用組合ノ制度ニ異ラスト言フ事ガ出来マスル』ト陳タルニ非ズヤ信用組合ハ對人信用則チ人身上德義ヲ布望セリ其希望スル對人信用ハ該法ニテハ人民利益ヲ得ンガ爲ニ德義ヲ重セシムルニ至ラシムルナリ吾報徳學ハ德義ハ人類當然ノ行爲ナルヲ知ラシメ德義ニ非ラザレバ人道ハ立ザルヲ説ケリ信用組合ハ財ヲ本トシ德ヲ末トセリ吾報徳社ハ德ヲ本トシ財ヲ末ニセリ又信用組合ハ中産以上人民ノ奢侈ヲ制止シ極貧罹災ノ人民ヲ救済スルヲ能ワズ我カ報徳社ハ奢侈ハ吾敵ニシテ極貧罹災ハ其原因アルヲ講明シ轉禍爲福ノ道ヲ教示セリ」(西ヶ谷可吉「報徳學ノ起因ヲ論ジテ信用組合ニ及ブ」、『大日本帝國報徳』第5号、明治25年7月、PP. 14~15)</p>
	「孰レカ報徳主義ヲ時世ニ適セズト謂フ」	? (?)	<p>「夫分度ハ報徳方法ノ大本ニシテ分度立タザレハ報徳ノ事業ハ息ムト云フテ可ナリ誠明先生封建時代ニ在テ分度ヲ定メラレタルハ時弊ニ制セラレ重箱内ノ區劃ニ適應ノ法ヲ規畫セラレタルニアラス又封建時代人類ノ各階級ヲ保全シ此等生活ノ程度ヲ維持セント欲シタルニアラスシテ國家ノ實力ヲ發達シ人民ヲシテ自治ノ精神ヲ作興セシメンカ爲メナリ安分知足ハ小康ニ安セシムルガ爲メニアラスシテ分度外ノ財ヲ以テ荒蕪ヲ墾シ新事業ヲ起サシメンカ爲メナリ……單ニ封建の各階級ヲ維持スルノ分度ナレハ報徳方法ハ膠柱ノ死法ニシテ又國家ノ發達ヲ傷フ害物ナリ誠明先生封建時代ニ生レタリト雖モ豈ニ如斯姑息ノ法ヲ行ハンヤ」(西ヶ谷可吉「孰レカ報徳主義ヲ時世ニ適セズト謂フ」、『大日本帝國報徳』第6号、明治25年8月、P. 14)</p> <p>「若シ分度法確立セサランカ鄉村ノ仕法ヲ行フ能ハス鄉村ノ仕法ナカランカ餘財空シク積滯スルノミ故ニ分度法確立シテ而シテ鄉村仕法行フ可シ常ニ生存發達ノ資料タル財源ヲ無窮ニ開キ本末並行以テ國家ノ富強ヲ見ル可キナリ」(西ヶ谷可吉「孰レカ報徳主義ヲ時世ニ適セズト謂フ」、『大日本帝國報徳』第7号、明治25年9月、P. 9)</p>

氏 名	演 題	年・月・日 (場 所)	主 内 容
	「實業家の 本分」	M26・12・24 (於「駿河 東報徳社」 秋 期 大 例 会)	「農として八年々産物の饒多ふらん事を計り工としては製作物の良精に注意し需用者の嗜好に投せん事を計り商としては彼我交通便を計り需要者の満足を得ん事を力免以て其販路を擴張し相互此利益を計らざる可らず此れ乃ち實業家の本分ふりと謂ふべし……／二宮誠明先生會で實業家の本を棄て未ふ走るを嘆息して言へることあり、曰く『勤苦して耕し五穀を植ゆるを樂むより實法を得て飲食するを樂むやう成行たり』、又曰く『仁を施して道を樂むより財を得て身を樂む方に流れたり』と嗚呼聞者果して愧焉たらざるを得んや、今の實業家たる者多くは勤儉を厭ひ逸樂に安んじ苟も其生を遂げんと欲する……」(西ヶ谷可吉「實業家の本分」、『大日本帝國報徳』第23号、明治27年1月、P. 13、傍点は省略)

Ⅲ．「杉山青年報徳学舎」の組織と教育活動

(1) 「杉山青年報徳学舎」の設立の動機

「杉山報徳社」が結成されると村民は申し合わせて、まず信明が明治2年から私的に開いている夜学を「村内青年ノ風紀ヲ改善シ智徳ノ修養ヲ普及セシムルタメ」⁴¹⁾に、徐々に多くの村内の子弟に出席させることにしていった。明治11年からは、これを正式に「杉山青年報徳学舎」と称すことにし、同年『青年報徳學舎規則』を制定して「杉山報徳社」に付属させることを明文化した。ここに、「夜学校」は新たに報徳社の青少年版としての教育機関となった。

『青年報徳學舎規則』の「緒言」には、設立の動機が詳細に記されているので、以下にその全文を掲げてみよう。

「 緒 言

本村報徳社ハ明治九年十二月ノ設立ニシテ創業以來毎月二回^(ママ)高田柴田ノ兩先生ヲ聘シテ教祖二宮誠明先生ノ遺教ヲ奉シ神徳皇徳其他諸般ノ恩徳ニ報ウルノ教ヲ守リ勤儉貯蓄ノ方法相立漸次本會隆盛ニ至リ壯年輩ハ毎月一二ノ夜會ヲ開キ報徳ノ眞理ヲ研究シ併セテ農業ノ道ヲ討論シテ智識ヲ交換シ大ニ開化ニ進歩スト雖モ青年ノ子弟ニ至テハ教育ノ方法未ダ全カラズコレニ依リ良法モ全村ニ遍キアタハズ常ニ社中ノ憂フル所ナリ情ヲ考フルニ青年輩ハ農家ノ種苗ノ如シ苗木ノ時良農能ク手ヲ盡シ曲レルヲ直シ培養ヲ施ストキハ成木ノ後良實ヲ得ル必セリ若シ惰農ニシテ蒔付ノ儘手入ヲ怠リ捨作りニスルトキハ我儘ニ育チ成長ノ後良結果ヲ得ルノ理無キカ故ニ青年輩ノ教育ヲ怠ルトキハ我儘増長シテ終ニ父兄ノ教訓モ聞入レズ各家破産ニ至ルトキハ本會良法タリト雖モ爲メニ廢滅ノ不幸ヲ見ルモ知ルベカラズコレニ依リ社中衆議ノ上村内ニ青年報徳學舎ヲ設置シ報徳ノ眞理ヲ研究シ傍ラ夜學を勉勵致サセ開化ニ導キ我儘ノ枝葉ヲ去リ良人ニ育て上ゲ本會ノ良法ヲ永遠ニ行ハシメント決定シ則チ左ノ通り規則ヲ設ク」⁴²⁾ (傍線は引用者)

ここには、人間は小さい頃から村内で、背後に報徳という教説をもったやり方で教育されるべきであるという点で、岡田良一郎が、「善種を播く」の報徳の教説を「最良ノ子孫ヲ生スル」運動へと応用していた次の考え方と類似した考え方が現れている。

「既ニ學齡ニ及ベハ學ニ就カシメ小學卒業シテ家ニ歸ルモノハ之ニ業ヲ授ケ是ヲシテ毎ニ善教ヲ聞カシムベシ然リト雖モ教ニ化セズシテ却テ里俗ニ化スハ風ノ草ニ加フルガ如クナルヲ

以テ勢甚ダ防クベカラザルモノアリ故ニ里ニ惡習アリテ子ヲ教ユベカラザル時ハ他郷ニ出シテ學バシムルニ若カズト雖モ 里ハニナルヲ善トス擇ンデニニ處ラズンハ焉シソ智ヲ得 資力無キモノニ至テハ望ミ易カラザルヲ如何トモス可カラズ於是報徳社ヲ結ンデ郷里ノ風俗改良スルノ緊要ナルヲ知ル社中相約シテ風俗ヲ改ムルニ汲々タルトキハ東隣ノ父母モ猶我ガ志ト相同ジ西隣ノ父母亦我ガ志ト相同シ一社五十戸若シクハ百戸勤儉忠實善業風ヲ爲シ隣家ノ子ヲ視ル猶ホ我ガ子ノ如ク社中何レノ家ニ遊ブモ教誨信切以テ惡ニ導クナク其子其弟志ス所皆善行ニ在テ存ス果シテ斯ノ如キトキハ子父ヨリ賢リ孫必ス子ヨリ賢リ三世ノ後略人種ノ改良セルヲ見ルニ足ルモノアラン」⁴³⁾ (傍線は引用者)

(2) 「杉山青年報徳学舎」の目的、組織、財政

『青年報徳學舎規則』の目的は、

「第一條 本舎ハ本村報徳社ニ附属スルモノニシテ教祖二宮誠明先生ノ遺教ヲ奉シ神徳皇徳其他諸般ノ恩徳ニ報ウルヲ以テ旨趣トスルガ故ニ勤儉貯蓄ヲ爲シ傍ラ夜學ヲ研究スルモノトス」⁴⁴⁾

のように、「杉山報徳社」と同様、尊徳に対する信奉が第一義とされ、その遺教に則って「勤儉貯蓄」の活動をするものと「夜學ヲ研究スル」ことが明記された。

また、組織については、原則として、

「第三條 本舎取締ノ爲メ幹事四名幹事補十一名ヲ置ク 但本村報徳社員ノ選舉ニシテ任期ハ滿一ケ年トス又再選スルコトヲ得」⁴⁵⁾

により、報徳社員ノ選挙で「幹事」4名と「幹事補」11名が選出された。「幹事」は、

「第四條 幹事ハ毎月四五回ツ、出席シ報徳ノ趣意ヲ説キ本舎ノ隆盛ヲ計ルヲ任トス」⁴⁶⁾

のように、毎月4、5回学舎に出張して「報徳の趣意」を説いた。そして、「幹事補」は、

「第五條 幹事補ハ幹事ヲ助ケテ本舎ノ隆盛ヲ計リ毎夜一名ツ、本舎ニ出勤シ舎員ノ出席ヲ記シ會計并ニ教場一切ノ事務ヲ整理ス」⁴⁷⁾

のように出席をとるなど一切の事務を行った。

教師は、明治2年の夜学開設以来、学舎でも同様に片平信明がこれを勤めていたが、明治21年からは、僧侶、小学校教員、医師等にもそれを依頼した。また、明治25年、「東方尋常小学校」が「庵原小学校」から独立した際、当小学校訓導となった谷豊吉が、学舎の教師も兼任する。谷は、以後杉山村に住み込み、学舎での授業を中心となって受け持った。

財政に関しては、

「第十二條 教場諸入費ハ悉皆本村報徳社善種金ヲ以テ支辨スルモノトス」⁴⁸⁾

のように、「教場諸入費」の一切が、「杉山報徳社」の「善種金」から賄われた。この「善種金」は、

「第八條 本舎ニ入舎スルモノハ善種金一ケ月金一錢宛本村報徳社へ差出スベシ」⁴⁹⁾

のように、学舎の生徒によっても追加されていたものであった。尚、明治25年7月から、「當舎ニ關スル一切ノ諸費」が、「杉山報徳社」の「積立學資金八百圓ノ利子ヨリ支辨」された。⁵⁰⁾

(3) 「杉山青年報徳学舎」の教育活動

学舎の授業は、原則として9月から4月までは午後7時30分から午後11時まで、5月から8月までは、午後8時30分から午後11時30分までとされ、⁵¹⁾「習字」「算術」「讀書」を学科目とした。⁵²⁾その際用いた書物は、「報徳書籍其他有益ノ書物」⁵³⁾であった。

明治25年7月に改定された『青年報徳學舎假規則』では、授業は9月1日から翌年3月30日までの期間に毎夜7時から10時まで行うものとなり、「習字」「算術」「讀書」の他に「作文」と「談話」が加えられた。⁵⁴⁾「談話」は、「教育勅語又ハ報徳訓⁵⁵⁾ニヨる」「修身談經濟談」と、「地理談歴史談物理談農商談養生談等」を、「毎夜二席ツ、談話ス」というものであった。⁵⁶⁾

当時使用されていた書物は明らかではないが、『杉山青年報徳文庫 品書臺帳』(「杉山報徳社」文書、明治42年1月付)の中には、古い蔵書として谷豊吉寄贈の中博士『興地誌略』、富田高慶『報徳記』(大日本農会、明治18年)、そして福住正兄『二宮翁夜話』(報徳圖書館、明治17年)等が記載されている。また、「杉山報徳社」に現存する書物の中で当時出版されたものには、斎藤高行『報徳外記 卷之上』(駿河國東報徳社蔵版、明治乙酉)、吉田永二郎『小學農書 第一卷』(有隣堂、明治25年)、そして玉木愛石『農業國語習字帖 丙編』(普及舎編輯所、明治26年)等があるが、これらは当時使用されていたかもしれない。

学舎では、尊徳が賞罰に教育的機能を認めていたのと同様に、次の規定により生徒に賞と罰を与えた。

「第十四條 舎員ノ内教旨ヲ守リ精勤衆ニ超ユルトキハ其旨幹事ヨリ本村報徳社總括并ニ社長副ヘ報シ褒賞アルベシ」⁵⁷⁾

「第十五條 舎員舎則ヲ犯ストキハ幹事はレヲ懲戒シ又止ヲ得サルトキハ退舎ヲ命スルコトアルベシ」⁵⁸⁾

さらに、明治25年7月以降は、生徒に対する心得として次の規定が設けられた。

「第三條 當舎ハ總テ二宮誠明先生ノ遺教ニ法リ教授ヲナス者ナレバ生徒タル者ハ先生ヲ尊敬シ其高德ヲ慕フベシ」⁵⁹⁾

「第四條 當舎ノ生徒ハ推讓ノ心ヲ養成スル爲メ毎月金一錢ツ、自^(ツマ)己ノ勤勞ヨリ收メタル金錢ヲ報徳社ヘ義捐スベシ」⁶⁰⁾

「第五條 當舎ノ生徒タル者ニハ貯蓄心ヲ養成スル爲メ毎月加入金トシテ自^(ツマ)己ノ勤勞ヨリ收メタル金一錢以上ヲ報徳社ヘ預ケ込ミ元利蓄積本人ノ基本金トナス」⁶¹⁾

「第六條 生徒ハ互ニ徳義ヲ重ンジ親睦ヲ旨トシ質朴ヲ守リ決シテ粗暴ニ流レ爭論等ヲナシ常ニ華美ノ風アルベカラス」⁶²⁾

「第七條 總テ教員役員ノ指揮ニ背クベカラズ」⁶³⁾

これらによると、学舎では生徒が自らの「勤勞」から得た資金を他へ「推讓」することができるようになる過程で、「得」よりも「徳」を、「爭論」よりも「親睦」を重視する精神が育つように意図されていたように思われる。

このような学舎の活動に対して、表8のように45名前後の生徒が、一カ月平均19日の授業に年度全体で50.3%~58.3%の出席率で参加していた(ただし、明治25年度~同27年度のみ)。また生徒は、授業を受ける他にも、休日等を利用して、「杉山報徳社」の社員と協力して、公益事業や「救済慈善義捐」の活動も行った。

表 8. 「杉山青年報徳学舎」の状況

	M25年度			26			27		
	生徒数 (人)	授業日 数(日)	出席率 (%)	生徒数 (人)	授業日 数(日)	出席率 (%)	生徒数 (人)	授業日 数(日)	出席率 (%)
9月	43	9	77.5	47	18	53.7	47	22	64.9
10月	45	28	71.4	47	20	55.5	47	23	69.0
11月	45	20	56.3	47	28	48.6	47	22	63.3
12月	46	26	51.8	45	23	50.1	46	23	58.2
1月	46	24	53.1	45	26	51.8	45	18	58.3
2月	46	19	47.8	46	14	42.5	45	18	44.9
3月	46	20	41.2	46	17	44.0	45	21	45.7
4月	46	12	34.2	46	7	59.0	44	11	56.0
年度 全体		158	54.2		153	50.3		158	58.3
一カ月 平均	45	19		46	19		45	19	

〔典拠〕明治25年度「生徒出席表」、明治26年度「夜學生徒出欠表」、明治27年度「生徒勤怠簿」（以上「杉山報徳社」文書）より作成。

〔備考〕明治26年度の6、7月は省略。

(4) 「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」の関係

ここで、以上みてきた「杉山報徳社」と「杉山青年報徳学舎」の教育活動より、報徳社の社員と学舎の生徒はどのような関係にあったのかをみてみよう（表9参照）。

表 9. 杉山村民の教育活動

		「杉山青年報徳学舎」	「杉山報徳社」
経済面での活動	学舎の生徒	「善種金」を納める 「勤労」によって資金を得る	→(報徳社へ提出) →{(報徳社へ義捐) (報徳社へ預ける)}
	報徳社員	(一部で文具、教科書、報徳書等を購入) (学舎の生徒等の子孫へ渡す)	←「善種金」の提出 ←「与孫金」の積立 (M17~) ←「柑橘積立」(M27~)
道徳面での活動	学舎の生徒	報徳書等を学習 習字、算術、読書等の学習 公益事業の実行 「救済慈善義捐」の活動	→(「常會」時、報徳社員の前で報徳書を輪読) →(報徳社員と協力)
	報徳社員	(学舎の生徒へ提供) (優秀な生徒の表彰も行う) (学舎の生徒と協力)	←{学舎の教師の雇用 報徳書、農工商書、経済書等の研究 「常會」での学習 農業上の学習 「力耕精業及特別善行アルモノ」の表彰 ←{公益事業の実行 「救済慈善義捐」の活動

まず経済面での活動としては、学舎の生徒は入学後に「善種金」を報徳社へ提出したり、「勤労」によって得た資金を報徳社へ義捐したりした。これに対して、報徳社の社員は、平素積立てた「善種金」の一部で学舎の生徒の為に文具、教科書、報徳書等を購入したり、また、「与孫金」積立で、村内の子孫が安心して暮せるようにした。次に、道徳面での活動としては、学舎の生徒が、学舎で報徳書等を学習し、その成果を、報徳社の「常會」時に社員の前で報徳書を輪読するなどして披露した。これに対して、報徳社の社員も、学舎の教師を雇用したり、日頃の報徳書、農工商書等の研究や農業上の学習で得たものを、学舎内に限らず、生活のあらゆる場面で学舎の生徒に提供した。また、学舎の優秀な生徒には、報徳社の正副社長から賞を与えることにした。さらに、学舎の生徒と報徳社の社員は、お互いに協力して、公益事業、不幸の者への配慮等を行った。

お わ り に

以上みてきたように、杉山村では明治前半期に、村内の経済上、道徳上の危機に問題意識を抱いた同志が、尊徳の弟子や報徳書から報徳の教説を吸収して「杉山報徳社」を設立した。さらに、明治2年以来行われていた片平信明の夜学に報徳の教説を取り入れて「杉山青年報徳学舎」を設立し、実業補習的教育を行うようにした。その際、成人を中心とする「杉山報徳社」と青少年を中心とする「杉山青年報徳学舎」とは密接な関係を保ちながら、杉山村の経済上、道徳上の危機を乗り越えるために独自の活動を展開した。確かに、それらの活動は村の上層農主導のものではあったが、一方で一般村民の積極的な支持と参加を得て繰り広げられたものであり、村の経済発展と村民の実業補習的教育および道徳面での精神形成に寄与していたと言えるであろう。

杉山村における種々の教育活動により、村内がどのような状態になっていたのかまでは実証できるデータを持ち合わせていないので、以下に杉山村を訪れている者の記述をいくつか掲げてみよう。まず、井上毅よりも早くから杉山村の報徳社を発見している三井銀行専務理事の早川千吉郎は、発見当時の様子を次のように伝えている。

「私が明治二十年帝國大學を卒業して大學院に入つて、農業政策の研究に従事して居る時、夙に獨乙の信用組合に着眼いたしましたけれども、其活用の精神は、之を我國史的固有の事實によりて求むることを期したのであるが、當時私は偶々、駿河の清見寺に詣るの序を以て此地方に就き種々視察を遂げましたが駿河地方殊に江尻附近の庵原村に於ける農業の發達、村民の勤勞、風俗の敦厚なるは、多く報徳教の感化に賴ることを偶然發見致し且つ又其報徳社は二宮尊徳翁の教へを受けた、片平信明と云ふ人の、主唱に出てたのを知つて、初めて翁の遺徳の大なるをを知ると、同時に我國に於ける、協同結社の萌芽は、已に幕末から存在して居ると云ふことを發見するに至りまして、誠に雀躍に堪えなかつた（中略）爾來報徳社を初め、各種の資料によつて、尊徳翁の事績を究め、我邦將來の農民保護制度は、外國の組織と長短相補ふて、言はば道徳と經濟の調和連絡の道を計らなければ、我國將來の完全なる農民保護政策を立てることは出来ないと確信するに至つた……」⁶⁴⁾（傍線は引用者）

また、多少時期は下るが、内務省参事官井上友一⁶⁵⁾の勧めで明治36年に静岡県内の報徳社を調査に訪れ、片平家にも立寄っている家庭学校長留岡幸助は、杉山村の状況を次のように伝えている。

「△報徳の柑橘栽培に及ぼせる影響

道徳と經濟との調和の爲め柑橘の昌える譯は、報徳の教が普及せるが爲め、柑橘が結實しても、之を盗むものがないから、垣もいらす、番人も要さない。故に是等の經費を全然省く事が出来る。こは經費の上からいへは夥しき利益である。吾人は庵原村に於て道徳と經濟との如何に調和して居るかを知ることが出来る。」⁶⁵⁾ (傍線は引用者)

「△全部落は好個の育兒院

……杉山部落には他人の子女を貰つて育てる習慣がある。予は先般この部落を訪ふて調らべて見た所が、貰ひ子二十有餘人もあつた。是は縣内他町村の不幸なる家の子供を貰つて育てるので、教育もすれば、農業も教へる。而して成人の後は他家へ縁付かせるゝにして居るのである。子を貰ふのは、……勞力の不足も一原因であるが、他を救済せんとするの篤志からするので、報徳が此部落の精神となつて居るのを見れば、尊徳翁の貧兒孤兒たりしに因みて何だか因縁の深きに感ずるのである。貧兒や孤兒の教養が斯やうな風になれば、院制^{インスチテュショナル}的孤兒院よりも其教養には大に効果がある。」⁶⁶⁾ (傍線は引用者)

このような記述からすれば、一地方の一農村が行つた教育活動であつたとはいえ、あながち無意味なものであつたようには思われない。

尚、「杉山青年報徳学舎」は、先述のように井上毅の勧めにより私立「杉山農業補習学校」となる。農業補習学校になってからの、杉山村における「杉山報徳社」と「杉山農業補習学校」の教育活動および両者の関係については、稿を改めて考察することにしたい。

[註]

- 1) 松村祝男『みかん栽培地域—その拡大の社会的意義—』古今書院、昭和55年、PP. 76~92。
- 2) 大阪教育大学歴史学研究室『歴史研究』10、昭和47年、PP. 1~22。
- 3) 片平信明(幼名嶺三郎、後に九郎左衛門と称す)は、天保元年3月に片平信眞の次男として生まれた。片平家は、累代杉山村の名主役を勤めてきた。父信眞は、弘化三年頃に庵原で蜜柑栽培を行っているが、これは庵原における農業としての蜜柑栽培の濫觴であると言われている。信明は、父親の後を継いで24歳で名主となり、村治や村内の蜜柑や茶などの農業発展に寄与した。明治2年には、村内の子弟を対象に夜学を創設したが、これは学舎の前身となった。明治9年からは「杉山報徳社」社長、そして明治27年からは「駿河東報徳社」(「杉山報徳社」の本社)社長として「杉山報徳社」の活動を指導し、後に「大日本報徳社」から「報徳社ノ鑑」(「大日本報徳社第十一回表彰式概要」、『大日本報徳』第28巻第311号、昭和3年4月、P. 32)とされる基礎を築いた。
- 4) 大日本報徳社『杉山報徳社紀要』(以下『紀要』と略称)、昭和10年再版、P. 13。
- 5) 6) 庵原村役場編、大正2年。
- 7) 西ヶ谷可吉編『片平信明翁傳 附杉山報徳社成績一斑』開明堂、明治42年再版、P. 5。
- 8) 『紀要』P. 14。
- 9) 『庵原郡庵原村誌』(以下『村誌』と略称)庵原郡役場編、大正2年。
- 10) 『紀要』P. 131。
- 11) 片平九郎左衛門講述「杉山報徳社經營苦心談」、『大日本報徳』第32巻第368号、昭和8年1月、所収、P. 23。
- 12) 『村誌』。

尚、「学制」が發布された後の杉山村では、次の記述のように、学齡期の児童でも貧窮の爲に小学校に行けないものが多かった。

「……当今各地方ニ小学校設立い多し候御規則ニ付當村之儀茂草ヶ谷村肅成舎(現在の「庵原小学校」の前身、明治7年頃設立か?——引用者注)へ合併ニ相成候得共兎角貧窮故……学齡中就学之者少く……」(「決心書之事」、明治10年8月付、「杉山報徳社」文書)

信明の夜学は、こうした状況を克服するのに、少なからず役立っていたものと思われる。

- 13) 前掲「杉山報徳社経営苦心談」PP. 23～24。
- 14) 同上、P. 24。
- 15) 前掲『片平信明翁傳 附杉山報徳社成績一斑』PP. 5～6。
- 16) 「報徳善種金加納物帳」(「杉山報徳社」文書)によると、明治9年12月にはこれは「杉山村 積善社」と呼ばれていた。正式に「杉山報徳社」と呼ばれるようになったのがいつからかは不明であるが、ここでは前掲『杉山報徳社紀要』の記述に従って、設立時の社名も「杉山報徳社」とすることにした。
- 17) 「決心書連名記」明治9年12月24日付、「杉山報徳社」文書。
- 18) 杉山村 積善社「報徳善種金加納物帳」、「杉山報徳社」文書。
- 19) 「推譲」とは、万人、万物が、そのよってきたる天地人三才の諸徳に対して、自らの徳行をもって報ずる、すなわち報徳を行う為の実践倫理の1つで、具体的には人々が今日のものを明日に譲り、今年のを来年に譲り、またそれらを子孫や他者へ譲るという行為を意味する。尚、この場合の「もの」とは、人の徳すなわち「人徳」以外にも、金穀およびそれらがもつ価値とか有用性である「金徳」や「米徳」なども指す。
- 20) 前掲「報徳善種金加納物帳」。
- 21) 前掲『片平信明翁傳 附杉山報徳社成績一斑』P. 31。
尚、杉山村では、「杉山報徳社」によるこうした「善種金」の使用とは別に、報徳が村内に入ってから、「艱難人」を「助合人」4～17人程で救済する活動も行われている(「助合連名帖」明治十年／第丑四月ヨリ、「杉山報徳社」文書)。
- 22) 「駿州の片平信明翁決心誓約書」、『大日本帝国報徳』第3号、静岡報徳学図書館、明治25年5月、所収、P. 28。
- 23) 「駿州の片平信明翁決心誓約書の續」、『大日本帝国報徳』第4号、静岡報徳学図書館、明治25年6月、所収、PP. 27～28。
- 24) 25) 前掲「駿州の片平信明翁決心誓約書」P. 26。
- 26) 同上 PP. 26～27。
- 27) 28) 『村誌』。
- 29) この本社は、設立当初は「報徳教会常堅社」と称し、明治12年中にはその社名を改めて「報徳教会駿河国東分社」と号したようである。正式に「駿河東報徳社」と呼ばれるようになったのは、筆者の知る限り明治18年10月の「駿河東報徳社規則」制定後であるが、ここでも『杉山報徳社紀要』の記述に従って、設立時の社名も「駿河東報徳社」とすることにした。
- 30) ～32) 『報徳社定款』、『村誌』所収。
- 33) 『庵原村史 一近代篇一』庵原村、昭和36年、P. 30。
- 34) 前掲『報徳社定款』。
- 35) 36) 『村誌』。
- 37) 前掲『報徳社定款』。
- 38) 『駿河東報徳社規則』明治18年10月、『村誌』所収。
- 39) 同上 第七條。
- 40) 同上 第十八條。
- 41) 『村誌』。
- 42) 『青年報徳學舎規則』明治11年、前掲『庵原郡庵原村誌』所収。
- 43) 岡田良一郎『報徳學齊家談卷下』、『二宮尊徳全集』第36卷、龍溪書舎、昭和52年復刻版、所収、P. 100。
- 44) ～49) 前掲『青年報徳學舎規則』。
- 50) 『青年報徳學舎規則』第十五條、明治25年7月、『村誌』所収。
- 51) 前掲『青年報徳學舎規則』第十條。
- 52) 53) 同上 第九條。
- 54) 前掲『青年報徳學舎規則』第九條。
- 55) 「報徳訓」とは、尊徳が報徳の教説を一般農民にわかりやすいように作成したもので、次のようなものであった(ここに記載したものは、桜町仕法書中『報徳元恕金雛形 地上』にあるいわゆる完成「報徳訓」で、「天保五甲午年／十二月二十四日／二宮彌太郎十四歳書」と署名されている)。

報 德 訓

父母根元在天地令命 身體根元在父母生育
子孫相續在夫婦丹精 父母富貴在祖先勤功
我身富貴在父母積善 子孫富貴在自己勤勞
身命長養在衣食住三 衣食住三在田畠山林
田畠山林在人民勤耕 今年衣食在昨年産業
來年衣食在今年艱難 年々歳々不可忘報德

(『二宮尊德全集』第12卷、二宮尊德偉業宣揚會、昭和3年、P.531)

「報德訓」は、我という無始無終の存在が、空間的に捉えられた天地人三才の徳と、時間的に捉えられた過現未三世の徳が織りなしている現実の中で生かされていることを悟り、自らの勤行をもってこれに報いるべきことを主張したものである。これは、「駿河東報徳社」の「常會」の際にも、礼拝用として掲げられていた(ただし、「駿河東報徳社」がこれと同じ「報徳訓」を掲げていたか否かは不明)から、こうした主張は村民に深く浸透していったと思われる。

56) 前掲『青年報徳學舎假規則』第十條。

57) 58) 前掲『青年報徳學舎規則』。

59) ～63) 前掲『青年報徳學舎假規則』。

64) 早川千吉郎談「秘藏にかかるライフアイゼンの遺書に就て」、『斯民』第1編第1号、報徳会、明治39年4月、所収、PP.100～101。

65) 留岡幸助「杉山部落の道德と經濟」、『斯民』第7編第2号、報徳会、明治45年5月、所収、PP.46～47。

66) 同上 P.45。

〔付記〕本稿をなすにあたり、史料閲覧に対して御配慮をいただいた「杉山報徳社」副社長片平貞明氏、片平信弘氏、片平歌子氏、そして「大日本報徳社」の諸方々には厚く御礼を申し上げたいと思う。

付表. 杉山村の報徳社運動に関する年表

(月、日)

年	社 会 山 の 状 況 杉 山 村 の 状 況	片 平 倡 明 の 行 動	報 徳 社 運 動 杉 山 村 の 報 徳 社 運 動	杉 山 村 と 外 部 者 と の 関 係	「善種金」 の 「推薦高」	物価 指数	小売り 米 価 (白米 1 升 =1.425 kg)
M 1	(一、一) この頃の杉山村の総収入は、2 千 7,800 円		(一、一) 日光仕法中止			100	
2	(一、一) 政府が、大教宣布運動を始める(～M 17. 8) (一、一) この頃、杉山村の寺の産業衰退 (一、一) 徳川の豪臣が杉山村「海潮寺」に移居、 青少年遊芸に浮かれる	(一、一) 夜学開設				122	
3	(1. 3)「大教宣布に関する詔書」発布	(一、一) 茶・桑・柑橘の栽植を卒先して行う				127	
4	(7. 18) 文部省設置 (一、一) 文部省内に編輯寮を設置、教科書編纂等を行う		(8. 一) 福山庵助、磐田郡三川村に「報徳遠藤社」設立			126	
5	(4. 28) 教部省、「三条教則」を通過 (8. 3)「学制」発布(第 25 章に夜学の定めが載る) (9. 8)「小学教則」を定める		(一、一) 福住正兄、教部省教導職に就任 (一、一) この頃、富田高庵が報徳仕法の官許に奔走			138	
6	(7. 28)「地租改正条例」布告、地租改正始まる	(一、一) 杉山村戸長となる	(一、一) 福住正兄著『富国捷徑』刊行(M 18 完結) (11. 一)「資産金貸付所」(「掛川信用金庫」の母体)設立			139	
7	(一、一) 茶輸出不正事件、M 7・8 年頃茶価暴落 (一、一) 農民一揆各地で盛ん (4. 一) 内務省勸業寮内に製茶掛設置、各種茶を製造、翌年から欧米各国へ試売	(一、一) この頃、村民に本格的に茶を播種させる				143	
8	(7. 一) 津田仙、「学農社」を設立、農事改良を志す	(一、一) 夜学を「夜学校」と改称	(11. 12)「遠江国報徳社」設立			146	
9		(10. 一) 熱海に入湯、福住正兄著『富国捷徑』を読む (10. 23) 柴田順作から報徳の教説を受ける (12. 24)「杉山報徳社」社長となる	(12. 24)「杉山報徳社」設立	(一、一) この頃から村民は福住正兄、柴田順作等から報徳の教説を受ける		152	
10	(9. 一)「三田育種場」設立	(1. 一) 福住正兄を訪問	(7. 一) 富田高庵、二宮尊純「興復社」設立 (10. 10) 岡田良一郎、私塾「東北学会」を創立 (一、一) 吉原から龍爪山に至る山道を開く		円 36.172	137	
11	(1. 24)「駒場農学校」開校	(一、一) 村民に 5 割増給の「働き出し」を行う (1. 一)「報徳教会常堅社」幹事となる	(一、一) この年「杉山報徳社」を模した結社 20 有余 (一、一) 各社を統一して「報徳教会常堅社」と称す (一、一)「杉山青年報徳学舎」開設 (一、一)「青年報徳学舎規則」制定 (11. 2) 岡田良一郎「掛川農学社(舎)」設立		117.214	141	
12	(9. 一) 横浜で「製茶共進会」(「共進会」の嘱矢)開催 (9. 29)「学制」を廃止、「教育令」公布		(一、一)「報徳教会常堅社」を「報徳教会駿河国東分社」と号す		237.931	145	銭 8.87
13	(一、一) この年、米価高騰		(一、一) 富田高庵著『報徳記』が天覧される		229.728	152	11.33
14	(一、一) M 14・15 年頃杉山村の茶栽培最盛期(1 年の茶生産額 784 円) (4. 5)「大日本農会」創立(幹事長品川弥二郎) (4. 7)農商務省設置		(一、一) 村民に「杉山青年報徳学舎」維持費の寄付を募る(800 余円集まる) (一、一)「杉山青年報徳学舎」の学資金 1000 円		339.360	156	11.45
15	(一、一) 杉山村の稲田が浮座子の被害にあう	(一、一) 浮座子の被害に対し、水桐油の所蔵を安価で放出	(一、一) 今市市で尊徳の 27 回忌行われる		420.371	146	9.50
16	(4. 11) 文部省、「農学校通則」制定 (6. 一)「江尻茶業組合」(庵原郡茶業組合の嘱矢)成立	(一、一) 戸長辞任	(一、一)「八柱神社」へ噴水水鉢を奉納 (12. 一)「八柱神社」へ石造鳥居を奉納		471.361	136	7.06
17	(一、一) この頃から、静岡県下各地で丸山教徒が暴動 (1. 一)「茶業組合準則」発布 (3. 15)「地租改正条例」公布 (12. 26) 前田正名編『興業意見』30 巻を太政官允可	(一、一) 富田高庵に会見	(1. 一)「与孫金」制度開始 (4. 22) 杉山村で、報徳社春期大会開催 (5. 一)「八柱神社」へ石燈籠一對を奉納 (一、一)「八柱神社」に「二宮尊徳翁ノ碑」建立		400.270	127	8.04

年	社 会 の 状 況 杉 山 村 の 状 況	片 平 信 明 の 行 動	報 徳 社 運 動 杉 山 村 の 報 徳 社 運 動	杉 山 村 と 外 部 者 と の 関 係	「普種金」 の 「推定高」	物価 指数	小売り 米 価 (白米 1 升 = 1.425 kg)
18	(1. 一) 静岡、山梨県下で借金党結成される (8. 6) 「農事巡回教師」の制度創設	(8. 一) 静岡県知事関口隆吉に「決心誓書」提出	(1. 一) 庵原郡茂畑村火災に 15 円を義捐、4 月に 県令関口隆吉から表彰される (4. 一) 岡田良一郎「大日本報徳社規則草案」を農 商務卿西郷従道に建議、「公報」号外に載る (一. 一) 富田高慶著「報徳記」が農商務省から出版 される (10. 一) 「駿河東報徳社規則」制定 (一. 一) 福住正兄著「富國雄健 首巻」が出版され、 「駿河東報徳社規則」が紹介される	(1. 一) 福住正 兄、「片平氏決心誓 書」の末に添ふの一 言」を執筆	277.846	132	10.02
19	(4. 10) 「小学校令」「中学校令」公布	(一. 一) 栃木県芳賀郡物井村の「報徳訓之碑」建立 に金 10 円寄付	(10. 10) 「遠江国報徳社」が第 1 回の「功労特志力農 植業者褒賞授与式」を開催		169.589	134	8.19
20	(11. 6) 「農学会」設立 (12. 29) 「茶葉組合規則」公布		(1. 28) 「杉山報徳社」役員 17 名が「八柱神社」 に「普願寺」を奉納 (一. 一) 福住正兄著「二宮翁夜話」が天覧される	(一. 一) この頃 から、早川千吉郎 が研究で来郡	195.456	142	7.38
21	(4. 25) 「市制町村制」公布	(一. 一) 二宮尊徳の第 33 回忌に野州今市町如来寺に 参拝	(一. 一) 「杉山青年報徳学舎」の独立校舎建設		193.216	145	7.28
22	(2. 11) 「大日本帝国憲法」発布	(10. 一) 大社教少講義となる (一. 一) 「大同社」主幹川合清丸と東京で会見			206.548	149	8.24
23	(一. 一) この年、米騒動盛ん (10. 30) 「教育ニ関スル勅語」発布		(一. 一) 二宮尊親、北海道移民による北海道開拓を 決意 (12. 一) この月の調査で「駿河東報徳社」支社 28 社、社員 973 名	(一. 一) 井上毅、 杉山村の報徳社発 見	169.024	156	12.74
24	(3. 一) 「庵原郡柑橘業組合」創立 (11. 17) 「小学校教則大綱」制定、徳性の涵養を最重 視 (11. 28) 信用組合法案、第 2 回帝国議会で提出 (審 議未了)	(一. 一) 尊徳の贈位式典、二宮神社建設に尽力 (一. 一) 「駿河東報徳社」副社長となる (一. 一) 牧田勇三、西ヶ谷可吉と、興津に静養中の 井上毅を訪問	(一. 一) この年、「駿河東報徳社」の支社数 30 余 社	(11. 一) 井上毅、 平田東助・杉山孝 平著「信用組合論」 に序文を敬せ、報 徳社を紹介する	184.699	150	10.39
25		(12. 15) 谷吉吉と、井上毅に「杉山青年報徳学舎」 の学則を渡す (一. 一) この頃、庵原郡の有志者による「地租軽減 の條」に反対	(3. 一) 「遠江国報徳社」が、機関誌「大日本帝国報 徳」を創刊 (7. 8) 「掛川信用組合」設立 (一. 一) 「東方尋常小学校」訓導の谷吉吉を「杉山 青年報徳学舎」の教員とする (7. 一) 「青年報徳学舎假規則」制定	(12. 13) 井上毅、 「東方尋常小学 校」を訪問	175.822	159	10.89
26	(2. 一) 前田正名「日本茶葉会」組織 (11. 22) 「実業補習学校規程」発布 (一. 一) この年、杉山区柑橘生産額高 2,800 円	(1. 一) 「駿河東報徳社」社長となる (5. 一) 大社教信少教正となる		(3. 一) 井上毅、 文部大臣に就任 (5. 16) 井上毅、 興津に一泊し学舎 を調査	186.184	168	11.22
27	(6. 12) 「実業教育費国库補助法」公布 (7. 25) 日清戦争勃発 (一. 一) この年、杉山区柑橘生産額高 10,000 円		(4. 14) 「小田原報徳二宮神社」設立 (7. 31) 静岡県知事小松原英太郎へ「庵原郡庵原 村杉山區実業補習学校設置伺」を提出 (8. 22) 「杉山農業補習学校」設置が認可される (8. 一) 「杉山農業補習学校規則」制定 (一. 一) 「駿河東報徳社」が「柑橘貯金」を開始	(4. 5) 井上毅、 秘書官小山健之ら と興津に一泊、彼 らに学舎を視察さ せる (8. 22) 小松原 英太郎、「杉山農業 補習学校」設置を 認可	205.787	175	11.47
28	(一. 一) 静岡県「農会規則」公布	(一. 一) 「静岡県教育会」の会合に出席 (10. 一) 豆州稲取村田村又吉が来訪、彼と会談する			211.358	177	11.58
29	(一. 一) 「静岡県農会」設立 (一. 一) 「庵原郡農会」設立		(1. 一) 田村又吉、稲取村「農家共同救済組合」設 立		228.953	194	12.42
30	(一. 一) この年、杉山区柑橘生産額高 6,200 円		(11. 一) 「今市報徳二宮神社」設立		197.707	216	15.49
31		(10. 6) 「山野に薨る」(大正 7 年 11 月、従五位)			211.150	227	18.73
32	(6. 9) 「農会法」公布				206.495	233	12.58
33	(2. 12) 「農会令」公布 (3. 6) 「産業組合法」発布				846.115	242	15.69

〔典拠〕大日本報徳社「杉山報徳社紀要」昭和 10 年再版、袴田銀蔵「故片平信明翁偉業の梗概」大日本報徳社文庫、庵原村役場「庵原郡庵原村誌」大正 2 年、八木繁樹「報徳運動 100 年のあゆみ」緑蔭書房、昭和 62 年増補改訂版、等より作成。